



湖水地方絶景紀行

夏休みに行きたい、とっておきのスポットと絶景ポイント

1. 湖水地方の魅力

イギリスの湖水地方（レイク・ディストリクト）と聞いて多くの人が思い浮かべるのは、絵本のような田園風景、豊かな文学の歴史、そしてイングランド最高峰の美しい自然だろう。特に、自然そのものの美しさだけでなく、何世紀にもわたって人と自然の営みが調和して作り上げた景観が高く評価されている。文化的景観の遺産として2017年にユネスコの世界文化遺産に登録されたことも、世界中からの多くの人を引きつけるポイントとなっている。

ピーターラビットの作者ビアトリクス・ポターが暮らし、物語の舞台となった場所でもある湖水地方というのは最も著名だろう。彼女が晩年に暮らした家ヒル・トップや絵本そのままの田舎道は今も残されている。また、ロマン派の詩人ウィリアム・ワーズワースが暮らしたダヴ・コテージもあり、美しい水仙の詩を詠んだ地としても有名だ。

また、最大規模の「ウィンドミア湖」をはじめとする16の大きな湖と、緑豊かな丘陵地帯、それらをつなぐフットパスでのハイキングも人気である。ふと周りを見渡せば、丘の斜面を埋め尽くすパッチワークのような牧草地とそこでのんびりと草を食む多くの羊（ハードウィック種など）の姿が見られ、モルタルを使わずに、地元のスレート石（粘板岩）を積み上げて作られた古くからの石垣が何キロも続く風景も特徴的だ。

また、スレートを使った、独特の灰色や黒みを帯びた石造りの美しい村々（アンプルサイドやケズウィックなど）や、グラスミアの村にあるサラ・ネルソンの店で作られる、170年以上変わらないレシピでスパイシーで独特の食感の伝統菓子グラスミア・ジンジャーブレッドも忘れてはならない。



これらの主要な観光要素を網羅した湖水地方の王道観光は、短いものでは半日や1日からツアーが組まれていて、週末を使って手軽に楽しめる地方観光として人気である。ロンドン発着の往復鉄道を付けたパッケージも利用しやすい。

今回は、これらの王道観光から少し外れて、もう少しディープに自然や独特の景観を楽しむ目的で出かけた。この旅で出会ったいろいろな発見をここで共有したいと思う。湖水地方は初めてという方はもちろん、王道観光には以前行ったことがあるという方にも役立つ内容になっていれば幸いである。

2. 始まりの丘と、北のウェイトローズ

ロンドンのユーストン駅からアヴァンティ・ウェストコーストラインの列車に乗り、オクセンホルムでローカル線に乗り換えて約20分。車窓の景色がイギリス特有のパッチワークのような田園風景から、山へ続く丘陵地帯へと変化していく。終着駅であるウィンドミアで下車し、バックパックを駅横にあるインフォメーションセンターに預け、私はまずこの旅の最初の目的地であるオレストヘッド（Orrest Head）を目指すことにした。

ここは360度の大自然の大パノラマ絶景が楽しめる人気のビューポイントだ。イギリスの著名な登山家兼作家のアルフレッド・ウェインライトが、人生で初めて登って湖水地方の美しさに魅了されて生涯を湖水地方のウォーキングガイド執筆に捧げるきっかけとなったと言われる。





駅の裏手から続くフットパスに足を踏み入れる。道はきれいに整備され、豊かな落葉樹の森の中を緩やかに登っていく。木漏れ日が地面に揺れる中、鳥たちのさえずりをBGMに歩みを進める。息が少し上がり始めた頃、視界が突如として開けた。登り始めてわずか25分足らず。そこに待っていたのは、言葉を失うほどの圧倒的な大パノラマだった。



眼下には、イングランド最大の湖であるウィンドミア湖が、まるで一本の巨大な青いリボンのように南北へと横たわっている。対岸には緑の丘陵地帯、そして遥か彼方には、荒々しく削られたフェル（山々）の峰々が薄く霞んでいる。山頂に設置された案内板を見ながら、これから歩く広大な自然に思いを馳せる。手軽に登れる割に、その見返りとして得られる景色のスケールは破格だ。帰りはブルーベルがカーペットのように広がる反対側の斜面から下ってみる。これほど完璧な「湖水地方のプロローグ」が他にあるだろうか。



山を下り、次なる移動の前に小腹を満たすため、ウィンドミア駅のすぐ隣にある建物へと向かった。重厚な石造りの旧駅舎を利用したその建物は、イングランド北部に展開する高級スーパーマーケット・ブース（Booths）だ。「北のウェイトローズ」とも称されるこのスーパーは、ただの買い物スポットではない。一歩足を踏み入れると、地元カンブリア産の食材が美しくディスプレイされている。

地元の農家から直送された新鮮なチェダーチーズや、地元のハードウィック羊の肉、そして棚を埋め尽くすローカルなクラフトビールの数々。私はここで、これからのハイキングのエネルギー源となる地元のフラップジャック（オーツ麦のお菓子）と、喉を潤すためのエルダーフラワーのコーディアルドリンクを購入した。スタッフの対応も非常に洗練されており、旅の始まりにふさわしい上質なローカル文化に触れることができた。ここにはお土産になる湖水地方の様々な商品が取り揃えられていて非常に便利なのだが、これについては後ほど述べることにする。

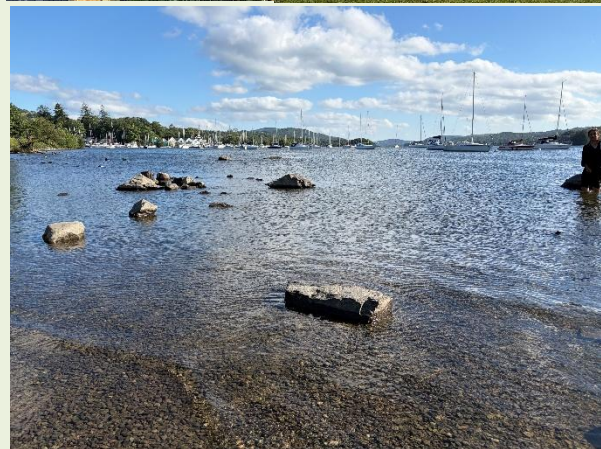
3. 静寂の湖畔と優雅な午後のエスケープ

ウィンドミア駅から南へ、賑やかな観光の拠点であるボーンズ・オン・ウィンドミアまでバスで進む。観光船の汽笛が響き、多くの観光客が行き交うピア（棧橋）周辺は活気に満ち溢れている。しかし、私はその喧騒を背に、湖畔沿いを南へと歩き始めた。目指すのは、観光客の波が嘘のように途絶える隠れた絶景ポイント、コックショットポイント（Cockshott Point）だ。





ピアから歩いてわずか数分、フットパスのゲートをくぐると、そこには穏やかな緑地が広がり、その先にも湖畔の遊歩道が続いていた。波の音だけが優しく耳に届く。湖岸でくつろぐカップルや家族連れのほか、芝生の上では地元の住民らしき人たちが敷物や簡易テントを用意してピクニックの準備をする姿も見られた。湖畔の木々の切れ間から見えるウィンダミア湖は、先ほどオレストヘッドから見下ろしたダイナミックな姿とは異なり、まるで鏡のように静かで、親密な表情を見せていた。私も湖畔の乾いたところに座り、スーパーBoothsで買ったドリンクを飲む。靴を脱いで湖の水に足を浸し、少し水辺を歩いてみた。湖の水は冷たくはなく、意外なほど透明なのが印象的だった。観光地のすぐ隣に、これほど静かで贅沢な時間が流れる「穴場」があること自体が、湖水地方の懐の深さを示している。



コックショットポイントを後にし、さらに南へバスで移動し、私はこの旅の大きなハイライトの一つ、英国の伝統に浸る時間を迎えることにした。ウィンダミア湖の東岸に静かに佇むラグジュアリーなカントリーハウスホテル、ストールズホール (Storrs Hall) でのアフタヌーンティーだ。18世紀に建てられたこのジョージアン様式の邸宅は、かつて詩人ウィリアム・ワーズワースが詩を朗読したとも言われる歴史を持つ。



厳かなエントランスをくぐり、湖を一望できる美しいコンサバトリーへと案内される。大きな窓の向こうには、美しく手入れされた芝生と、その先にウィンダミア湖が見える。その日は午後からお天気が好転しとても気持ち良かったため、せっかくなので湖を眺められるテラスにした。再訪した湖水地方で素晴らしい景観に恵まれたことを祝し、グラスシャンパンで独り乾杯した。



運ばれてきた三段のティースタンドは、まさに芸術品だった。下段には、定番のキュウリとクリームチーズのサンドイッチをはじめ、スモークサーモン、上品なエッグサラダなどのサンドイッチが美しく並び、中段には、まだほんのりと温かい自家製のプレーンスコーンとフルーツスコーン。これに地元の濃厚なクロテッドクリームと甘酸っぱいストロベリージャムをたっぷり乗せて口に運ぶと、小麦の香ばしさとクリームの



ココが一体となり、至福の味が広がった。上段を飾る色彩豊かなパティスリーやケーキたちも、甘さ控えめで繊細な味わいだ。



選んだアール 그레이の紅茶をスタッフが絶妙なタイミングで注ぎ足してくれる。目の前に広がる碧い湖を眺めながら、銀のティーポットを傾ける優雅なひとときを楽しんだ。アフタヌーンティーの後は、ホテルの敷地をぐるりと散策を。湖に沿った広い敷地には手入れが行き届いたガーデンのほかに、木が生い茂るミニフォレスト、湖に突き出た石造りのパビリオン（テンプル）、湖を眺めるガゼボ（東屋）などを見ていると、このホテルに滞在しているかの気分になる。贅沢な空間と、歴史の重み、そして洗練されたサービス。ストールズホールで過ごした時間は、慌ただしい日常を完全に忘れさせてくれる、旅の最高のスパイスとなった。



4. 北の荒野への誘いとマーケットタウン

翌朝、私はウィンダミアを離れ、有名な555番の2階建てバスに乗り込んだ。バスはアンブルサイドやグラズミアといった美しい村々を抜け、山々の間を縫うようにして、湖水地方の北部へと進んでいく。南部が優美で穏やかなリゾート地だとすれば、北部への旅路は、より荒々しく、ダイナミックな自然の核心部へと向かう巡礼のようだ。

到着したのは、北部のウォーキングのメッカであるケズウィック (Keswick) の街。ここにはウィンダミアのような巨大な鉄道駅はないが、だからこそ、古き良きイングランドのマーケットタウンの風情が色濃く残っている。街の中心にあるモートホール（旧町役場）の周りには、地元のジャムやチャツネ、クラフト製品、アウトドア商品のショップやカフェなどが並び、石造りの建物が美しいコントラストを描いている。



ケズウィックの街の最大の魅力は、そのすぐ目の前に「湖の女王」と称されるダーウェント湖 (Derwentwater) が広がっていることだ。ケズウィックの市場を抜け、並木道を10分ほど歩くと、視界が一界に広がり、ダーウェント湖の桟橋にたどり着く。ウィンダミア湖が縦に長く文明の調和を感じさせるのに対し、ダーウェント湖は円形に近く、周囲をスキドウやブラカントラといった1000メートル級の荒々しい巨大なフェル（山々）に囲まれている。その佇まいは神秘的で、神々しい美しさを湛えていた。街のあちこちにあるカフェからは、香ばしいコーヒーの香りやベーカリーからは美味しそうなパンの匂いが漂ってくる。私は、これから始まる本格的なトレッキングに備え、コンパスと「もしもの時」のためのミニライト、それにケズウィックの歴史あるベーカリーで名産のプラムブレッドを買い、バックパックに詰め込んだ。



5. 石造りの橋と清流、息をのむ大サプライズ

ケズウィックからダーウェント湖の東岸に沿って、木々が生い茂る細い小道を南へと進む。ここからは、水と緑、そして岩肌が織りなす、湖水地方で最もフォトジェニックなエリアへと足を踏み入れることになる。しばらく坂道を登っていくと、澄んだ小川のせせらぎが聞こえてきた。そこに現れたのが、アッシュネスブリッジ (Ashness Bridge)だ。18世紀半ばに作られたという素朴な石造りの小さな太鼓橋である。そこを流れる小川の冷たい水に手を浸すと、山から湧き出たばかりの清涼さが体中に染み渡った。



しかし、本当の感動はその先に待っていた。アッシュネスブリッジから、さらに車1台がやっと通れるほどの急な勾配の山道を上へと登っていく。鬱蒼とした森に囲まれ、視界は遮られている。本当にこの先に絶景

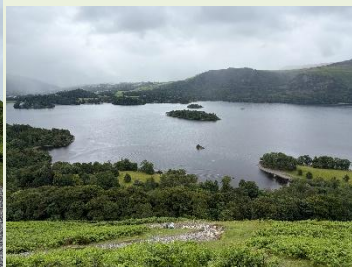
があるのだろうかと不安になり始めたその時、突如として森が途切れ、目の前の空間が完全に開けた。そこが、サプライズビュー (Surprise View)と呼ばれる場所だ。

崖の淵に立つ。まさに「サプライズ」という名に相応しい、衝撃的な光景が眼下に広がっていた。足元から数百メートル下には、先ほどまで畔にいたダーウェント湖の全景が丸ごと収まっている。湖に浮かぶ緑の島々、対岸にそびえる山々のひだ、そして遠くケズウィックの街並みや、そのさらに奥にあるバセンスウェイト湖までが、遮るものの一切ない広大なパノラマとなって目に飛び込んでくるのだ。高所恐怖症の人なら足がすくむほどの断崖絶壁だが、そこから吹き上げる風は心地よく、自分がまるで湖水地方の空の上から見ているような錯覚を覚える。しばらくの間、私はただ沈黙し大自然の劇的な演出に圧倒され続けていた。



6. キャットベルを越え静寂の荒野へ

翌日、私はダーウェント湖の対岸、西側へと回った。今回の旅の最大の挑戦であり、最も楽しみにしていた本格的なトレッキングに挑むためだ。目指すは、湖水地方で最も愛されている山の一つキャットベル (Cat Bells)と、そのさらに奥に潜む穴場のフェルメイデン・ムーア (Maiden Moor)である。ケズウィックの中心部から5分くらいのところにある船着き場ケズウィック・ローンチから湖上クルーズに乗り、対岸のハウズエンド・ジェッティーで下船する。そこからすぐにトレイルが始まる。キャットベルは標高451メートルと、山としては決して高くはない。しかし、その姿は非常に特徴的で、丸みのある美しい稜線を持っている。



登り始めは急なジグザグの坂道だが、少し登るだけで、背後にダーウェント湖がどんどんその姿を大きく広げていく。途中にいくつか、手を使って岩をよじ登るような場所もあり、冒険心をくすぐられる。稜線に出ると、右側には緑豊かなニューランズ・バレー、左側には碧いダーウェント湖という、左右を絶景に挟まれた最高の空中回廊のようなところを歩くことになる。風が強まり、山の息吹がダイレクトに肌に伝わる。一步一步、岩を踏みしめて登り、ついにキャットベルの山頂に到達した。山頂は狭くゴツゴツしているが、そこからの360度の視界は、まさに登頂の苦労を完全に吹き飛ばすものだった。ケズウィックの街がミニチュアのように見え、北部の山々が幾重にも重なって押し寄せてくる。



多くのハイカーは、このキャットベルの山頂で満足して引き返していく。しかし、私はバックパックのストラップを締め直し、さらに南へと続く尾根道を突き進むことにした。ここから先が、知る人ぞ知る静寂のルート、メイデン・ムーア (Maiden Moor) への道である。キャットベルの頂を過ぎると、あれほど賑やかだった人の声がピタリと止んだ。聞こえるのは、自分の足音と、吹き抜ける激しい風の音だけだ。標高576メートルの山頂へと上がっていく。景色の性質も一変した。

そこは、見渡す限りの広大なムーア（荒野）だった。岩肌の山から、ヒースやシダ、苔が生い茂る、緑と茶色、そして季節によっては紫色の絨毯で覆われた、果てしない平原のような尾根が続く。観光地としての湖水地方ではなく、自然そのものが持つ「野生」の土地だ。誰もいない荒野で出会ったのは、側を歩く人間のことは全く意中にない様子で黙々と草を食む羊だった。



道は次第に曖昧になり、時折現れるケルンだけが目印となる。歩いていると、大自然の広大さに比べた自分の存在の小ささを思い知らされる。振り返ると、遥かに遠くにキャットベルの小さな頂が見える。メイデン・ムーアの最高地点付近に腰掛け、ケズウィックで買った



ておいたブルムブレッドを食べた。初夏なのに強風が吹く山頂で冷えた体に、ずっしりと重くてほのかに甘いブルムの入ったパンの素朴なおいしさが染み渡る。五感が極限まで研ぎ澄まされるような、この静寂の時間こそが、旅の中で最も贅沢な「穴場」の体験だったのかもしれない。山登りの動作というものは普通の生活にはない動きだからなのか、この時の体験が後に酷い筋肉痛を引き起こすことになり、過酷だったけれど良い思い出として記憶に深く刻まれた。



7. 想いでを紡ぐ品々と、終わらない緑の余韻

山を降り、ケズウィックの街へ戻ってきた頃には、心地よい疲労感が満ちていた。旅の最後の仕事は、この素晴らしい体験を形にして持ち帰るためのお土産選びだ。私は、ケズウィック中心部にあるスーパーBoothsを訪れた。街のお土産屋を一軒一軒見て歩かなくとも、Boothsに来れば湖水地方の多くの商品がここで揃う。私は、カンブリア州の豊かな植物をインフューズしたクラフトジン「レイクス・ジン」のミニボトルと湖水地方ピーターラビットのマグカップと缶入りミントを買った。今回登山のお供になった、地元ベーカリー・ブライソンス (Bryson's) のブルムブレッドもお土産にした。これらの品々をバッグに詰めると、私の旅は静かに完成へと向かっていった。色とりどりのBoothsのトートバッグもかなり気になったが次回に回すことにした。



帰りの列車を待つ間、あっという間に過ぎ去った数日を振り返る。オレストヘッドから始まったこの旅はストールズホールの優雅な時間、ケズウィックの活気、アッシュネスブリッジの清流、サプライズビューの衝撃、そしてキャットベルとメイデン・ムーアで味わった圧倒的な孤独と自然の美しさへと、くるくるとその表情を変えていった。

湖水地方は、ただ景色が美しいだけの場所ではない。一歩足を踏み入れ、自分の足で歩くことで、自然と人間が何世紀にもわたって紡いできた歴史のハーモニーを、五感すべてで体感できる場所だった。心地よい疲労感とともに、私の心にはすでに、次にこの「緑のフェル (山)」へ戻ってくる日の計画が芽生え始めていた。

8. 今回の旅で気付いたちょっとしたポイント

- ・湖水地方は場所によっては携帯の電波が入りにくいところがあるので、特に山の方に行くときには紙の地図を持参すると安心。ついでに磁石もあれば万全。
- ・キャットベル程度の山でもトレッキング用のシューズやストック持参が便利。
- ・山頂付近は風が強かったり急な雨もあるので、暑くてもパーカーなど持参すると安心。
- ・ウォーキングの後にアフタヌーンティーなどちょっとしたレストランへ行く場合には、簡単な着替えと靴を持参し、ホテル到着後にお手洗いで着替えをすると便利。

JTBヨーロッパマイバスUK 北出泉水

<https://mybus-europe.jp/>

info_uk@mybus-europe.com

Tel: 020 3167 9197

(営業時間: 月~金 10:00~17:00)